Japanese Association of Russian Scholars

金子幸彦先生のこと

中村喜和

『プーシキン詩集』が岩波文庫で出たのは1953年のことである。その年の春に私は大学にはいり、第二外国語としてロシア語を習いはじめたばかりだった。書店で買いもとめた新刊の文庫本の訳者が自分のおそわっている先生であることを知って、誇らしい感情をいだいたことをおぼえている。ロシア語のクラスは8人だけだったが、それまで先生の専門が何であるか、クラスの中でだれひとり知らなかったのである。私はさっそく次の授業のおわったあとで、先生にサインをお願いした。先生はちょっとはにかんだような顔をしながら、私の名前の下に様をつけ、それから日付を入れ、自分の名前を書かれた。万年筆のペン先を裏側にして書くのがそのころから先生の癖だった。

教壇で自分のことを話されることはまったくなかったけれども、上級生たちの口から、断片的な情報がもれてきた。東京外語の学生時代にはラグビーの選手で今も頭蓋骨に陥没した箇所があること、学生運動の「首謀者」として逮捕され無期停学の処分をうけたこと、などである。私たちのまわりには山村工作隊の経験者や学生自治会の幹部などが大勢いて、先生には一目おいている様子がうかがわれたが、先生の側から格別彼らに目をかけてやる風はなかった。

二年生のプロ・ゼミでいきなりプーシキンの「スペードの女王」のテクストを読まされたときは面くらった。むずかしくて歯が立ちそうになかった。このころは中級のいい教科書がなかったのである。

三年生からの学部ゼミナールは大学院ゼミと合同で、オガリョフの回想録を読んだ。井の頭公園のわきにある先生のお宅に十人ほどが毎週一度ずつ集まった。時刻は夕食後の数時間ときまっていた。話がはずんで、深夜に及ぶこともあった。

近所にバイオリンの初心者がいて、「のこぎりの目立てにはまいるね」と言われたことがあった。もっとも、あるとき何かの用件でうかがったとき、隣室からクラシック音楽がながれてきた。ラジオかレコードのようだった。先生はその音をすこししぼっただけで話をつづけたから、音楽は愛されたのである。

私たちがお宅にお邪魔していた1950年代から60年代にかけて、先生はずいぶん仕事をされた。年譜によれば、『ロシア小説論』の中心部分はこの時期に書かれたし、翻訳はプーシキンを中心に中世からソビエト期におよび、その対象は文芸作品にかぎらず、評論も少なくなかった。岩波文庫別冊として今も版を重ねている『ロシア文学案内』は1961年の刊行である。

ロシア文学関係者の中では例外的に、先生は酒を好まれなかった。若い人たちの

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

談論風発をわきから眺めて楽しまれたとしても、酔いにまかせての怪気炎や大言壮語には顔をそむけられた。

今年の夏の暑いさかりの7月25日に、先生はこの世を去られた。享年は82。その直前にお嬢さんの奔走で歌集『歳月』が刊行された。病床で私たちにその歌集を示されたときも、やつれた先生の顔に幾分かはにかみの表情がうかんだように見えた。しかしもはやサインをしていただけるような容態ではなかった。400首あまりの作品の中から1首だけあげておく。

いくそたびわれ惑ひつつこの業にたづさはり来て老いさびにけり

◎事務局記録

◎1993年度（第43回）総会・研究発表会は下記の要領で神戸市外国語大学において開催された。

10月22日（金）午前　開会式，研究発表会
　　午後　拡大理事会，研究発表会，公開シンポジウム，懇親会
10月23日（土）午前　研究発表会
　　午後　講演，総会

研究発表者とその題目，および司会者は次の通り（会場別，発表順）。

10月22日　第一会場

浦井　康男（福 井 大）――『哀れなリーザ』における名詞表現の分析
　　－データベースに多変量解析を適用して－
　　（司会　丹辺　文彦）
野村　孝夫（大阪外大）――『智恵の悲しみ』の三一致について
　　（司会　藤沼　　貴）
杉山　春子（中 央 大）――プーシキンの物語詩『ジプシー』のパロディー性－悲劇と田園詩－　（司会　浅岡　宣彦）
秦野　一宏（海上保安大学校）――ゴーゴリの二葉亭訳をめぐって
　　（司会　諫早　勇一）
松本　賢一（大阪外大）――二つの十字架
　　（司会　木下　豊房）

同　第二会場

臼山　利信（東外大院）――述語的用法における形容詞長語尾形および短語尾形の意味特徴について－「一時的特徴」，「恒常的特徴」表示のしくみ－
　　（司会　石田　修一）

NII-Electronic Library Service